

## 論説

大津波によつて施設が全壊してしまつた気仙沼市の一景島保育所は

今、牧沢地内の丘陵地内で移転新築作業が進められている。潮見町にあった同保育所は海岸線から数百メートルに近い保育所だった。高潮や大雨による

「水の危険」にさらされていた同保育所では、入所児童の避難対策に神経をつかつた。とくに津波発生の際の避難である。たとえ僅かな地震の揺れでも直ぐに避難態勢をとり、保育士たちに誘導された入所児童は隣接する中央公民館に避難した。その行動は素早く、近隣の住民の模範となつていた。東日本大震災の際も、機敏な行動で

気仙沼中央公民館に避難し、全員無事に家族のもとに帰ることができた。

10数軒という大津波に耐えられる建物が近くにあったことが幸いしたのだが、「地震が起きたら津波の用心」の意識と、ふだんの避難訓練の大切さを教える。

### 堤防計画

#### 説明会で見えてくること

今、気仙沼市では堤防計画について行政と住民が意見交換する市民説明会が開催されている。内湾地区を皮切りにした同説明会は29日まで12会場予定されているが、県が示している高さの堤防計画に抵抗を感じる意見は今後も出てくるだろう。

観光を前提に考えた地区の場合、景観を遮る堤防計画の高さはどうしても支障になる。ふだんから「有事の際には機敏に避難する」という意識を持つていれば、「コンクリートの壁」は疑問。避難道の整備こそ重要ーとの思いだ。復興計画を進めると

き、「生命、財産の安全」は最優先すべきもので、「安全」を疎かにした復興は有り得ない。とあって、何が何でも「安全」でなければならぬと考えるのはどうか。人はさまざまナリスクの中で生活している。身近な例を挙げれば車の運転である。人命や

生活に支障のない限りで、ある程度までのリスクを許容することは避けられない。そのリスクをどこまで許容出来るかの判断が、今回の復興では厳しく問われているのだ。

この考え方は、被害をゼロにはできないだろうが、一人ひとりの意識の持続・高揚によって被害を少しでも少なくするという「減災」の理念に通じる。

コミュニティの持続や自然との共生を防災面に取り入れるということは、「防災」を狭く考えてはいけないということである。避難意識の持続・高揚は、「減災」の大事な条件の一つ。堤防計画の説明会から見えてくる課題に関心を寄せる必要がある。